心肺蘇生法に神様は必要か？

　その夜。

「…………」

　瞬は大事なことを失念していた。

　妖精モドキはこちらの世界に来てから、住む場所が無いので、今のところは瞬の家に住んでいる。

　故に、

「てーことで、しばらく泊めてくれると嬉しいなーって思うんだ」

「何が『てーことで』だ。貴様、神だろう？　何とかならんのか？」

「商業の神様が住む場所を勝手に作れるわけがないでしょ？」

　こんな感じであーだこーだと数時間後。

　ヘルメスも妖精モドキと同様に、瞬の家にしばらく厄介になることになったのである。

　で、ここからがさらに瞬は驚愕する。

　週明けの月曜日。

　クレイオスが暴れまわったのにも関わらず、学校は普段と変わらない。そういえばテュポーンの時もそうだったが、怪物が出たことを、不思議なことに、誰も何も言わないのである。

　避難しているやつがいたので、絶対にクレイオスやそれと戦う自分達のことを目撃されたと思ったのだが……と瞬がいぶかしんでいると、チャイムが鳴り、朝のホームルームが始まった。

　いつものように、起立、礼をしてから着席。学校では生意気な瞬も、ここは普通にやる。そして、先生の話が始まった。朝の連絡事項である。

　瞬は基本的には適当に聞き流すのだが、この時は違った。先生が、珍しく、それでいて何やら不吉なことを言い始めたからだ。

「突然だが、今日からクラスに編入生が加わることになった。入って来い」

　後半の台詞は教室の外に向けられたものだ。

　すると、ドアが元気に開き、美少女が姿を見せる。その姿を確認した刹那、瞬は頭を抱えていた。

　うわー、見たことあるやつじゃん……。まじかー……。

　心の中でそう呟き、いっそ現実逃避してやろうかとも思ったが、結局は何も解決しないので、瞬はしぶしぶとその編入生の方に顔を向ける。そいつと目が合うと、こともあろうに瞬に手を振ってきた。

　当然、クラス中の視線が集まる。中には何か話しかけてくるやつもいたが、瞬はそれを無視した。

　そいつはそんな瞬に「？」と言う様な顔をしたが、取りあえず今は気にしないことにしたのだろう。黒板に自分の名前を書き、クラスメイトの方に向き直る。

「えーっと、今日から編入してきたって言います！　よろしくお願いします！」

クラスに編入してきた「神野明菜」。この名前は偽名だ。何故そう気がついたのか。何故ならば、瞬はそいつの本名を知っているかだらだ。

　その「明菜」って名前は、「商い」から来てるんだろうな……と瞬は心で突っ込んだが、それは後で聞くことにする。それより、何故彼女がここにいるのか、それが問題だ。

　編入してきた美少女。それはヘルメスだった。